



メキシコ合衆国

Estados Unidos Mexicanos



パンデミックにより岐路に立つ日墨協会

三井 広一

メキシコの新型コロナウイルス 感染状況概要

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的蔓延－パンデミックにより、メキシコの死者数は28万人、感染者も300万人を超え、加えてインド発祥のデルタ株をはじめとする変異型ウイルスの感染拡大により、現在も増え続けている。この影響は、医療はもちろん、精神面、経済状態など、メキシコ社会に多大な影響を受けている。

そもそも、新型ウイルスに対する意識が低い人も多く、感染しても気づかぬうちに治ったり、または亡くなった後に感染したことがわかるなど、感染を確認するための検査を受けていない人も多い。当然そういった人は、何の対策も取らずに普通に生活し、感染をさらに拡大させている。よって、実際の感染者数は、公表されている数字の4倍とも8倍とも言われている。

また、感染拡大により、ステイホームを強いられ、仕事を失い、経済不安などから、精神的にも大きな影響を受けている。その結果ストレスやうつ病などの増加、家庭内暴力 (DV) もかなり多くなっている。心身両面にわたってメキ

シコ人は疲弊し、感染予防を続けることに疲れ、普通の生活に戻りたいという人も多く、今ではこれまで控えていたフィエスタ (パーティ) の実施、旅行、会食など、メキシコ人にとって無くてはならない日常の行事が普通に行われつつある。街へ出かけても、人通りや車の交通量は、パンデミック前の状態に戻りつつあるのではないかと思われる程である。

ただ、街で見かけるほとんどの人は、マスクをきちんと着用し、スーパーマーケットやショッピングモール、レストランなど人が集まる施設では、入場の際の検温や除菌、そしてマスクの着用は厳守

され、感染予防には細心の注意が払われている。

また、日系社会への影響も大きく、パンデミックで亡くなる日系人も増えている。毎年、8月のお盆法要では通常、30名から40名前後の亡くなられた方の法要を行っているが、今年は62名もの方の法要となった。最近まで理事会メンバーだった人など、身近な方の感染も増えつつある。

日墨協会が遭遇するコロナ禍

日墨協会は、2016年以降、日墨協会の財務状況健全化を目指し改革を行って来た。レストランや宴会事業の見直し、テニスコート



写真1：お盆の法要

やプール、ジムを使用する人たちのための会員制の整備、メキシコ各地における日本祭りへの参加などにより収益アップに力を入れて来た。さらに、日墨協会施設内で行う春と秋のお祭りについても、それまで以上に収益が上がるようになった。その結果、毎年、純益が出るようになり、施設の改築や修理ができるようになった。

そして、日墨協会は、2012年に会計報告に不備があり、政府からその許可を取り上げられたことがあったが、受けた寄付を会計処理ができる許可を再度取り戻し、広く社会から、正式に寄付を受けることができるように手続きを行った。

並行して日墨協会は、様々な収益事業を行っていたため、社団法人でありながら営利企業と同様の会計処理が課せられ、寄付を公式に受け入れることができない団体となっていたのだが、その状況を改善するために、営利部門を切り離す試みを行った。その結果、2019年には、日墨協会の営利部門を全て担う株式会社ジャパンプラブが設立され、さらに、同年11月には、公式に寄付を受けて経理処理できる許可を取り戻すことができた。結果、2020年からは、日墨協会は社団法人として、ジャパンプラブから資金提供を受けつつ健全経営を行い、日墨協会が本来目指すべき事業に専念できる時代の到来となった。

この矢先、2020年3月には、メキシコも新型コロナウイルス感染拡大が本格的となり、日墨協会も、主要事業である日本語学校の対面授業が出来なくなり休校することになったり、お祭りの中止、いけばなや茶の湯、和菓子の講座

など全ての文化活動ができなくなった。その上、レストランの一時閉店、宴会、スポーツジム事業の停止などにより、資金提供を行うジャパンプラブの収益は9割減となり、従業員の給与カットを進めなければならなくなり、日墨協会への賃貸料も減額され、資金援助が十分できなくなった。結果、日墨協会の職員や日本語学校講師の給与をカットせざるを得なくなったが、一方では、日本語学校の授業を継続するためにリモート方式を導入するなどして、少しでも多く収入を得ることに努めて乗り越えて来た。

日墨協会の主要事業の日本文化事業（いけばな草月、茶の湯、書道、墨絵、和食、和菓子、武道、日本文化紹介の祭りなど）も出来なくなり、未だ再開の目処は立っていない。これからどのように文化事業を進めていくのかを考えなければならない。税法上、寄付領収書発行の許可を受けた団体として文化事業をきちんと遂行しなければその存続は危うい状況になって行くとの危機感を持って協会運営のやり方をいろいろ試行錯誤している。

今こそ日墨協会の存在意義を示す時

タイタニック号遭難事故の映画を見た人は多いと思うが、タイタニック号の沈没が近づく中で、甲板で楽士たちが演奏し、避難しようとする人々を落ち着かせようとしている場面を覚えている人も多いと思う。それと同じようなことが、今年20年を迎えたアメリカの同時多発テロが発生し、飛行機が突っ込んだ世界貿易センターの中で見られたということを知った。100階以上の階から階段を降りて来る人を、15階で警備員が避難誘導していた。そこで警備員は、“God bless America”を歌って避難者を誘導していたという。階上から降りてくる人は、全てが助かったわけではない。証言によるとトイレに駆け込んだり、1階直通のエレベーターを使おうとするなど、判断を誤って命を落とした人が多くいたという。このような危機に遭遇した際、どれだけ冷静な判断が大事であるかということを証言者は語っていた。そこで、音楽が、歌が、避難者の冷静な判断を助けたのかもしれない。

パンデミックは、文化・芸術の



写真2：日墨会館全景

分野にも大きな影響を与えた。劇場も、映画館も、コンサートホールも閉鎖され、文化・芸術に関わって来た人たちは活動の場を失われてしまった。多くのアーティストが失業し、また、活動を続けて行くことができなくなった。そのような中で、街頭で、アンプやスピーカーを携えて歌や音楽を披露するプロのアーティストもいた。劇場でないと聞けない音楽が、道で聞けることもあって、家に閉じこもっていた人たちが窓から顔を出し、野外コンサートを楽しんだ。外に出られない生活が続く中、心が休まる一時を楽しんだ。

数年前、NHKの看板番組の一つである「クローズアップ現代」で、ノーベル賞生物学者エリザベス・ブラックバーン博士が進めた「テロメア研究」について紹介していた。歳とともに縮まって行くテロメア。それを伸ばして細胞から若返らせることができ、さらに、癌を防げる可能性もあるという。「テロメア研究」でブラックバーン博士が取り入れた秘策とは、その一つが瞑想である。瞑想によってストレスが軽減し、テロメアを伸ばすことに役立っているという

実験結果である。また、英国ではアートの力で認知症の症状改善や鎮痛剤の使用量が減ったという結果が出ており、医療や介護の現場に変化が現れている。日本でも、香川県にある「四国子どもとおとなの医療センター」では、地域のボランティアの協力を得て、花壇を作ったりフラワーアレンジメントを医療に取り入れることで、子供たちの病状や精神面に変化を来し、医療を助けている事例もある。

現在、日墨協会では、活動の場を失った琉球祭り太鼓のグループが、敷地内で稽古をしている。他にも、剣道や居合道のグループなどが稽古場を求めて頼って来ている。他にも日墨協会を頼りたい人は多くいるはずである。

そこで日墨協会は、新型コロナウイルスの感染拡大によって体の健康面だけではなく、心の面も影響を受けている人が日系社会にも多いことから、そういった人たちに対して、少しでも安心して生活をしていただくために、日系の医師や心理カウンセラーの協力を得て、「心と体の健康フェア」の実施を計画している。医師によるセ

ミナーや抗原・抗体検査、必要に応じてPCR検査の実施、さらに個別もしくはグループのカウンセリングをより多くの人に実施して行く計画である。特にカウンセリングには、日墨協会で進めている文化事業も一緒に行い、お花やお茶、また、書道などの日本文化が、心の面にどのような効果が見られるのかを検証することを考えている。心の面の安定に繋がり、少しでも安心して生活できるようになるということになれば、また、日本文化への関心が高まり、日本文化がより生活に密着したものになるのではないかと考えている。

この計画には、外務省が提供している「海外在留邦人・日系人の生活・ビジネス基盤強化事業」の助成金の申請を行い、助成を受けることにより、多くの日本人、日系人、また日墨協会へつながるメキシコ人に提供し、コロナ禍で疲弊した心のケアにつながることを願っている。

来年は、1897年に明治維新時の功労者の一人榎本武揚によって推進された34人の日本人がチアパス州に上陸し、日本人のメキシコ移住の始まりとされた榎本移民の125周年（注）を迎える。日墨協会が、この節目に125年間継承して来た日本文化、また和の心が基本となる文化事業を進めていくことの重要性を示すことができれば、日墨協会の存在価値はより高くなるのではないだろうか。

（編集部注）榎本移民125周年については、『海外移住資料館だより』2017年秋号でも紹介されている。<https://www.jica.go.jp/jomm/outline/ku57pq000001x6dz-att/dayori47.pdf>

（みつい こういち 日墨協会副会長）



写真3：太鼓のグループの公演